『論叢』玉川大学教育学部紀要　2015，pp. 61～80

［原著論文］

リチャード・ウィルズの「日本島」
――イギリスで最初に説明された「日本」――

森　良和

要　約

1577年，ロンドンで発刊された世界地誌書『東西インド誌』は，イギリスで最初に日本について説明した項目「日本島」を含んでいる。編者のリチャード・ウィルズは大航海時代の諸成果を受けて，ヨーロッパ以外の世界の情勢に関心を持っていた。一時聖職者を目指していたウィルズであるが，多様な新世界情勢を紹介したリチャード・イーデンの仕事を受け継ぎ，アジア地域をも含めた世界地誌書を完成させた。それが『東西インド誌』であるが，内容の多くはイベリア半島からの情報によっている。特に日本についてはザビエルやフロイスをはじめとするイエズス会宣教師からのものであることが「日本島」の文章から読み取れる。本稿は当時の日本がどのようにイギリスに紹介されたのかを具体的に示すとともに，「日本島」の典拠を明らかにするものである。

キーワード：16世紀イギリス史，大航海時代，日英交流史

1　はじめに

1577年，イギリスで初めて本格的に日本という国を紹介した著作が現れた。書名を『東西インド，および実り多く豊かなモルッカ諸島に向かうまでに存在する他の国々，すなわちモスクワ，ペルシア，アラビア，シリア，エジプト，エティオピア，ギニア，カタイのシナ，日本などへの旅行誌，および北西航路についての論考，および主の1503年になされたローマ市紳士ルイス・ヴェルトマンヌスLewes Vertomannusの航海と旅行記』（以下『東西インド誌』，なおヴェルトマンヌスについては以下イタリア名「ヴァルテーマVarthema」とする）という[1]。その一部に日本を紹介した「日本島，および東の海にある他の小さな島々」（以下「日本島」）の項がある[2]。

マルコ・ポーロの『世界の記述』（いわゆる『東方見聞録』）以来[3]，「ジパング」の存在は広くヨーロッパに知られていたが，その英訳が出されたのは『東西インド誌』刊行の2年後の1579年であるから，イギリス国民は『東西インド誌』によって初めて従来名前でしか知られ

所属：通信教育部　受理日　2016年2月19日

ていなかった日本という国の詳しい情報を知るようになった。ここに収められた日本についての記述には，「日本島」に加えて「アロイシウス・フロエスAloisius Froesよりシナとインド在住のイエス・キリストの同志へ」と題された文章が見えるが，後者は大著『日本史』で有名な宣教師ルイス・フロイスLuis Froisの書簡の英訳である[4)]。

『東西インド誌』は古英字体で印刷され，全4巻，総フォリオ数481に及ぶ。同書はベッドフォードBedford伯夫人ブリジットBridgetに献じられ，「リチャード・イーデンRichard Edenにより一部編纂され英訳された」「リチャード・ウィルズRichard Willesによって増補され，完成された」などとある[5)]。ただし，これら「二人のリチャード」は日本に渡航したことはないし，ヨーロッパ以外の地域を訪れたこともない。もちろん当時はイギリスと日本の間に交易はおろか，個人的な交流も皆無であった。「日本島」はウィルズの執筆になるものであるが，ウィルズが個人的事情によって日本について特別な思い入れを持っていた形跡はない。

では，ウィルズとはどのような人物であり，どのような背景があって「日本島」について述べたのか。また「日本島」は『東西インド誌』全体でどのように位置づけられ，日本がどのように紹介されているのか。さらに「日本島」について述べる際に典拠とされた文献や史料はいかなるものであったのか。管見の限り従来これらの問題について正面から論じたものはない。本稿はそれらの問題提起に対する一定の見解を示すものである。

2　リチャード・ウィルズの略伝―リチャード・イーデンとの関連で

まず両者が生きた16世紀中葉のイギリスの時代背景を見ていこう。著しい人口増加もあって，当時のイギリスでは海外進出の機運が急速に到来していた。宗教的には対立するものの，アメリカやアジアにいち早く進出して莫大な富を得た大航海時代の先行国スペインやポルトガルから最新の知識を吸収し，両国やフランスに伍して国力を高める必要に迫られた。それには経済力の著しい向上が急務であり，そのためのさまざまな打開策が打ち出されていた。もちろんそれらを詳述するのは本稿の趣旨に沿わない。ただ，その打開策としてここでは魔術と海外発展計画がかなりの注目を集めていたことに注意したい。

両者の取り合わせは一見奇妙であるが，ともに飛躍的に新しい力や富を獲得できる可能性を探ったところは共通している。時代はちょうど科学革命の端緒を開いたコペルニクスの『天球回転論』（1543）が発刊されたころ，現代的な意味での科学，化学，物理学，天文学，地理学などの概念は無論存在していなかった。秘教的・魔術的なイメージのつきまとう錬金術や占星術は古来連綿と存在し続けており，異端の嫌疑がかけられたこともしばしばであったが，自然界に潜む「隠れた力」を発見し，それを巧みに応用することで画期的な富と便利さを手に入れる可能性を探る営みは絶えることがなかった。広義の「魔術」を操る手がかりとして，ルネサンス人文主義の成果によって盛んになったヘルメス主義などの古代の叡智が注目されたのは周知のとおりである。

一方，それに加えて当時のヨーロッパの知的活動に刺激を与えた大きな要因に，大航海時代によってもたらされた「新世界の発見」がある。新世界に存在するかもしれない未知の力が，ヨーロッパに物質的にも精神的にも革命的な刺激を呼び起こすと考えられた。「近世三大ユートピア論」と言われるトマス・モアの『ユートピア』，ピエトロ・カンパネッラの『太陽の都』，フランシス・ベーコンの『ニュー・アトランティス』のいずれもが，アメリカやアジアへの航海の途上「理想郷」にさまよい込んだ設定になっていることが想起されよう[6)]。

このような時代状況を反映し，学者や思想家には広義の「魔術師」とみなされた者も多かった。その典型的人物像はイーデンと同時代の「哲学者」にして女王エリザベスの宮廷付占星術師であったジョン・ディー John Deeに見い出せる。ディーの研究者は，ディーがイーデンと接触していたのは間違いないとしている[7)]。ディーが北極海を経由して東アジアを目指す新航路，いわゆる北方航路の発見に向かう航海者に度々助言を与えているのもこの時代の「魔術師」らしい[8)]。イーデンやウィルズの仕事もこうした流れのなかにある。こうした時代背景をもとに，「日本島」を書いたリチャード・ウィルズの人物像を，リチャード・イーデンとの関連でオクスフォード版『国民伝記事典』などに拠りながら概観してみる[9)]。

リチャード・イーデンは1520年ころに生まれたので，その26年後に生を受けるウィルズの父親世代に当たる。イーデンはケンブリッジ大学で指導を受けたサー・トマス・スミスSir Thomas Smithに大いに感化されたとみられる。スミスは後年，女王エリザベスにイギリス人の海外植民計画を提言するなど，同国の対外発展に熱烈な関心を抱いていた。イーデンはこのスミスを通じてテューダー朝中期に活躍した何人かの進取的思想家たちと交流できたとみられるが，錬金術の研究にも打ち込んでおり，一時王室の蒸留水製造人や，ノッティンガムシャーのさるジェントルマンの錬金術師などを務めている。

イーデンは国王エドワード6世時代に廷臣ウィリアム・セシルWilliam Cecilの秘書となってから本格的に西インド，すなわちアメリカ大陸に関わるようになった。セシルは後年エリザベス女王の片腕として権力の中枢に座るようになる。ただ，エドワード王時代に最も権勢を誇っていたのはノーサンバランドNorthumberland公ジョン・ダッドリー John Dudleyであった。ダッドリーはイギリスを当時の世界帝国スペインに比肩しうる海洋国家として立国する野望を抱いていたので，その実現のため航海術，地理，言語，自然学，幾何学などに優れた人材の結集を図っていた。イーデンが翌1553年，ドイツ人セバスティアン・ミュンスター Sebastian Münsterの『世界誌』第五巻を部分的に英訳して『新インディア論』を発刊したのはその一環である[10)]。続くメアリ女王時代にもイーデンは翻訳書『新世界あるいは西インド十書』（1555）を公刊したが，これがのちに『東西インド誌』第一部の主体となる。同書はスペイン宮廷廷臣ペドロ・マルティール・デ・アングレリアPedro Mártir de Anglería（英Peter Martyr of Angleria）の『新世界十書』（1533）と，スペイン人ゴンサーロ・フェルナンデス・デ・オビエード・イ・バルデスGonzalo Fernández de Oviedo y Valdésの『西インド誌』（1547）のかなりの部分を英訳した書である[11)]。しかしイーデンが翻訳したこれらの書はスペイン宮廷の偉業を讃えて

いるので，イーデンは常にイギリス国教会から異端の嫌疑をかけられていたという。

それでもイーデンは依然北方航路の開拓に強い関心を抱き続けていたようで，1557年に北方航路の探検家セバスティアン・カボットSebastian Cabotを，さらに1562年にはフランスに渡って後年ニュー・ファンドランドに植民した同様の探検家ハンフリー・ギルバートHunfry Gilbertを訪ねている。この間，1561年にはマルティン・コルテスMartin Cortésの『地球と航海術概要』を『航海術』として英訳出版している[12)]。イーデンは10年間フランスやドイツの各地を巡歴し，その間は主に錬金術の研究に携わっていたらしい。けれどもイーデンの大陸滞在はちょうどユグノー戦争の開始期に当たっており，そのため身の危険を感じたようで，1572年，サン・バルテルミの虐殺発生の直前にイギリスに帰国している。帰国後もイーデンの研究意欲は依然衰えず，ジャン・テスニエJean Taisnierの『航海綱要』や[13)]，先述のロドヴィーコ・デ・ヴァルテーマの創作も交えた旅行記も英訳し，これらの翻訳が成った直後の1576年に死去した。

イーデンが死亡したころ，イギリスの海賊や私掠船がカリブ海をはじめとする中南米海岸一帯に盛んに跳梁していた。当時リチャード・ホーキンズは奴隷貿易で莫大な利益を上げていたし，その部下フランシス・ドレークが世界周航の大略奪航海に出帆するのは翌年である。こうしたイギリスの海外発展熱の高揚を背景に，その時代の新しい地理的成果を取り入れて総合した世界ガイドの刊行が待望された。西インドに関してはすでにイーデンがいくつかの重要書を翻訳して最新情勢を知らしめていたので，それに加えて東インド情勢も含めた新版世界ガイドを刊行するという大事業が弱冠30歳のウィルズに託された。

ウィルズは1546年，イギリス南部ドーセットのプーラムに生まれ，62年，オクスフォード大学ニューカレッジに給費生として進学した。やがてルーヴァン（現ベルギー）にしばらく滞在した後，大陸各地を巡歴しながら教育と学問に勤しむようになった。この間，65年には大司教座のあるドイツのマインツでイエズス会に入会し，68年には同地の大学で修士号を得ている。その後ウィルズは同じく大司教座のあるトリールに移り，聖職者養成の教育を受けたのち，ローマ巡礼の旅に出，そのままイタリアにとどまって72年までペルージャ大学で修辞学の教授を務めた。

イエズス会士となったことで，ウィルズがアジアやアメリカで布教活動を行っている同会宣教師たちからヨーロッパに送られてきた報告や資料を参照するのに非常に有利な立場に置かれたことは疑いない。ウィルズは「日本島」において，「興味のある読者は私の親しい旧友ペトルス・マフェイウスPetrus Maffeiusの4巻本を参照すべし」としているが[14)]，このマフェイウス，イタリア名ジョヴァンニ・ピエトロ・マッフェイGiovanni Pietro Maffei（以下「マッフェイ」）はむろんイエズス会士で，ウィルズがローマを訪れたころ，イエズス会創立者イグナティオ・デ・ロヨラの肝いりによって設立されて間もないローマ学院の神学教授であった[15)]。

しかし同年末，ウィルズはカトリックの聖職から離れる決意をしてイギリスに帰国した。ウィルズがなぜ突然イタリアを去って母国に帰ったのかは不明であるが，パスク-スミスによれば，

ウィルズはオクスフォードに戻ることを熱望していたという[16]。母国に戻ったウィルズは，1574年にカトリックを棄ててイギリス国教会に帰依し，その後オクスフォードとケンブリッジで学位を得ている。この間1573年にラテン語の『詩論』を著しているが[17]，同書がエリザベス1世の重臣バーリー男爵ウィリアム・セシルに献じられている点はイーデンとの接点を感じさせる。

ウィルズはまもなくベッドフォード男爵フランシス・ラッセルFrancis Russellの後援を受け，地理学の研究に勤しむようになった。その成果が『東西インド誌』で，上述のように同書が男爵夫人に献じられているのはこのためである。また，同書にはマーティン・フロビッシャーMartin Frobisherの有名な北西航路探検の記述も含まれ，この部分は同男爵の娘で「有徳の貴婦人ウォリックWarick伯夫人アン貴下」に宛てた親書という形式を取っている。このウォリック伯こそはフロビッシャーの探検を支援したパトロンであり，ウィルズは伯爵夫人を庇護者として求めていたのであろう。当時の著述家が異端者や扇動家の著作から引用する場合，強力な庇護者を持つことが重要であったからである。また，1576年2月21日に書かれた同書のシナの項目が，別の宮廷貴婦人エリザベス・モリスンElizabeth Morisyn夫人に宛てられているのも同様の理由とみなされる。しかしウィルズは『東西インド誌』の出版後まもない1579年に死亡し，わずか33年の生涯を終えた。

3 『東西インド誌』の構成

では『東西インド誌』の構成を大まかに見てみよう。同書は西インド，すなわちアメリカについて述べられた第一部と，東インド，すなわちアジアと，若干アフリカについて述べられた第二部とに分かれている。

アメリカについて書かれた第一部（fol. 1–229）は，先述のイーデンの『新世界，あるいは西インド十書』を元版としたもので，冒頭のベッドフォード男爵夫人への献辞の次に，コロンブスの人物像と事績，「インディアン」という名の由来や肌の色について簡潔に説明がなされている。第一部の大半は，上述したマルティールの『十書』のうちの四書までと，オビエードの『西インド誌』からの抄訳である。このうちマルティールはアメリカへの渡航経験はないが，オビエードは長期にわたってパナマ・ダリエン地域のスペイン人支配者であった。前記二書には原著者から神聖ローマ皇帝カール5世（スペイン王カルロス1世）に宛てられた献辞が添えられている。その他の具体的内容は，スペインから現地までの航路，現地の金鉱，真珠，動植物，果実，葦，魚類などの産物，赤道直下の自然風土，気温や居住可能地域，大西洋と太平洋の潮汐，大西洋・太平洋間の土地の厳しさ，インディアンの生活と女性たちの様子，キューバ，エスパニョーラ島，バカラオ島（アメリカ大陸北方にあると考えられた架空の島），ペルー，ラプラタ川，ラブラドル，フロリダなどの地理・地誌となる[18]。

リチャード・ウィルズが構成した第二部（fol. 230–479）は，さらに前半部（fol. 230–353）

と後半部（fol. 354–479）とに大別され，前半部は同書出版の前年1576年になされた上述のフロビッシャーの航海から始まり，その次にシナと日本が配されている。こうした構成は当時イギリス最大の国家事業の一つが北方航路の発見であり，その最も重要な目的地がモルッカ諸島やシナ，日本とみなされていたことの表れである。なお，シナ情勢に関する記述は，1549年に同地で捕えられて何年か獄中生活を送ったポルトガル人ガレオット・ペレイラGaleotto (Galeote) Pereiraの体験記の英訳である[19]。

次の項目には北方航路を意識して「かつてインドからヨーロッパや世界の他の地域に香辛料，宝石，金などがもたらされたさまざまな航路と経路，およびセバスティアン・カボットの航路，カタイから東インドに至る北の海，とりわけモスクワ経由の航路に関する試論」が続いている（fol. 254–259）。これを受けて，スカンディナヴィア半島からモスクワを経てカタイへ達するまで，ユーラシア大陸北部各地のさまざまな国や地域の情勢が述べられている。具体的な地名としてはスコンディア（＝スカンディナヴィア），スウェットランド（スウェーデン），ボスニア（ボスニア湾），ゴートランド（島），アイスランド，グローエンランド（グリーンランド），フィンランド，ラポニア（スウェーデン北部），ノルウェーなどがみえる。これらの地はいずれも北方航路の開拓に重要な意味を持つと考えられていた[20]。

また，モスクワ（大公国）関係の記述にかなり紙幅が割かれている（fol. 271–320）のは，当時イギリス・モスクワ会社が盛んに活動していたことが反映されていよう。既述のセバスティアン・カボットは15世紀末の北米探検で有名なジョン・カボットの息子であり，父とともに北西航路の可能性を探っていたが，晩年はモスクワ会社や北東航路の開拓に関わっていた。このころのモスクワ大公国はイヴァン雷帝の専制時代であり，その宮廷を訪問した神聖ローマ帝国外交官のヘルバーシュタインHerberstein男爵ジギスムンドSigismundeからの情報と，1553年に北東航路の開拓を試みたものの翌年遭難死したヒュー・ウィロビーHugh Wylloughbye (Willoughby) が，ラテン語と英語で北東方面の王侯に宛てた6通の書簡も載せられている[21]。「凍てつく海での航海」という項目も見える。

次に話題はペルシアに移り（fol. 321–335），そこまでのイギリス商人たちの航海と，探検家アンソニー・ジェンキンソンAnthony Jenkinsonの旅が述べられる[22]。ジェンキンソンも1558年にイヴァン雷帝に謁見しており，その許可のもとモスクワから南下してペルシアに向かって数多くの現地情報を得ている。そのうえでペルシアの国情についてさまざまな面から記され，宗教と風俗，同国までのルート，ペルシア湾，ペルシア王からイギリス商人が得た特許状，その特許状を携えて訪問したアーサー・エドワーズArthur Edwardsら貿易商人の活動，また彼らが貿易のためペルシアに持ち込んだ商品などの内容となっている。

第二部前半の最後はアフリカについて手短かに述べられたのち（fol. 336–354），ギニアに達した二人のイギリス人，最初のギニアへの航路，ピンテアドPinteado, Antonio Anesがポルトガル王から受けた特許状，アフリカ・エティオピアのブラック・ムーア国についてより豊富な叙述をしたギニアへの第二航海，マデイラ島の鳩，赤道直下のセント・トマス島（ギニア湾の

サントメ・プリンシペ島）などの項目が見える。ピンテアドとは1553年に行われたイギリス人航海者ウィンダムThomas Wyndhamのアフリカ探検に際して水先案内を務めたポルトガル人であり[23]，またここで言う「ギニア」はギニア湾沿岸地域のアフリカ西海岸中部一帯を指す。

「第二部」の後半（fol. 354–379）は，先述の『ルイス・ヴェルトマンヌス（ヴァルテーマ）によるアラビア，エジプト，ペルシア，シリア，東インド，エティオピアのへの航海と旅についての七書』を英訳したものである。ヴァルテーマは1503年から08年までヨーロッパから西アジア，アフリカ北東部，インド，マラッカ海峡を経てモルッカ諸島までの大旅行を敢行し，その旅行記を著したイタリア人である。ただ，同書にはかなりのフィクションも含まれているという。ヴァルテーマはヨーロッパ人として初めてメッカに入った人物と言われ，同市の様子が詳細に述べられている。この「七書」の構成は次のようになる。

「第一の書」はアレクサンドリア，カイロ，トリポリ，アンティオキア，ダマスクスなどイスラム世界について言及されたのち，特にメッカ市内の様子とイスラム教について詳しく述べられている。「第二の書」では紅海のカムラン島や，アデン，ラギ，ダンテ，サナ，ダマールなどのアラビア諸都市，およびエティオピア（ここでは紅海対岸のソマリア沿岸地域を指す）のザイラなどについて記されている。「第三の書」ではペルシアの町や港，島，川などについて簡潔に触れられている。「第四の書」からはインドが舞台で，カンビア，セヴァル，ダブリ，ゴガ，デカン，カノノール，ビシネガール，トルマパタニなどのインド西海岸都市について，「第五の書」では特にカリカットについて藩王や宗教，食事作法，階級，儀式，争い，航海術，王宮，香辛料，果実などの様子が記されている。「第六の書」ではインド南部からシオロマンデル（コロマンデル）を経てセイロン島に達し，次いでタルナサセリ（タニンダーリ），ベンガル，ペゴ（ペグー）など今日のミャンマーやインド北東部の町に立ち寄ってから，マラッカ，スマトラ島，バンダン島，ボルネオ島，ジャワ島など東南アジア各地を巡歴して，カリカットに戻る旅程を記録している。この間，インドでの寡婦殉死をはじめとする習俗や，この地で産出するナツメグ，クローヴ，メース等の香辛料に注目している。「第七の書」はアフリカについての内容であり，モザンビーク島やエティオピア沿岸のいくつかの町，金やオイルの生産に言及し，マダガスカル島や喜望峰，セントヘレナ島近海を通過してポルトガルに帰還し，最終的にローマに帰還したところで完結している。

4 「日本島」の内容と典拠

「日本島」の記述は実質上『東西インド誌』のフォリオ252から261までである。ただし，その大部分はルイス・フロイスが1565年2月20日付で都（京都）よりシナとインドのイエズス会士に宛てた書簡の英訳であり，それがほぼフォリオ254から260までを占めている。最後部には「シナからモルッカ諸島に至るまでの日本の彼方にある島々」と題した短い一節が加えられている[24]。

結論から言えば，フロイスの上記書簡以外の部分も含め，「日本島」で述べられている内容はその当時まで日本で布教活動を行った，あるいは当時行っていたイエズス会宣教師たちからヨーロッパに送られた報告をほぼ踏襲し，その英訳である。以下「日本島」の本文からいくつかの文例を示し，その典拠と思われる文章と比較対照しながら典拠を明らかにしていきたい。

なお，日本で布教活動をしていたイエズス会宣教師たちの日本報告は，もちろん日本から発信されたものが多いが，マラッカやゴア，コーチンなどからのものもあり，また宛先もリスボンやローマ以外に，ゴアをはじめアジア地域のイエズス会同志へのものもある。いずれにせよそれらはいったんゴアに送られ，そこからリスボンに運ばれたのち，多くが当時ポルトガル最大の知的拠点であったコインブラ大学に集められて調査・検証された。そして同大学の神学者マヌエル・ダ・コスタ Manuel da Costa はそれらの報告や書簡類を整理してまとめ，『1568年までの東方布教史』をポルトガル語で著した[25)]。コインブラに達するまでには何度かの転写を経るし，さらにスペイン語（カスティリア語）から訳されたり，ラテン語に翻訳されることなどもあり，著作として出来上がる際にはオリジナルの草稿から細部に異同が生じる場合も多かったであろう。

ダ・コスタの上掲書はローマに送られたが，先述のようにウィルズが敬愛するローマ学院の神学者ピエトロ・マッフェイは同書をラテン訳するとともに，4倍にも及ぶ内容を加え，1571年にローマで新たに『東方布教史』として出版した[26)]。ここには『日本書簡』も含まれており，前述のように，ウィルズは「日本島」本文の最後でそれを参照するように勧めている。もっとも同書にはかなりの誤りが見られたので，マッフェイはその後自身でコインブラやローマなどを訪れて資料を精査し，1588年に再度『インド史』を出版している[27)]。ウィルズがイタリアに滞在したのは1572年までであり，79年に死去しているので『インド史』を参照することはなかったが，1571年版は参照できたであろう。

なお，以下に引用するイエズス会書簡の訳文は，1990年代末に松田毅一氏らにより1598年に出されたエーヴォラ版日本書簡集から訳出されたものであるので，マッフェイの『東方布教史』とは細部に若干の相違があろう[28)]。また，ウィルズの文章は拙訳によるものであるので，両者を対比する際にはともに二重三重の翻訳が行われることになるが，ここでは論旨の性格上それらを単語レベルで逐語的に検証することはせず，イエズス会書簡と「日本島」とにかなりの類似性が認められることのみを指摘する。

＊日本の地理的位置について

〈ウィルズ〉

われわれに知られている世界の果てには，気高いジャパン Giapan という国があり，ジャポン Japon とかジャパン Japan とも綴られる。この国はあらゆるアジアの国々を越えた，カタイと西インドの間，赤道より36度北の，東の海にあり，スペインやポルトガルの南部と同じような気候で，当地から海路で6000リーグの距離にある。そこまで旅するのは

内乱や横行する海賊，頻繁に起こる難破などで，非常に危険である[29]。

〈イエズス会書簡の類似文〉

「1549年11月5日，フランシスコ・ザビエル書簡」

彼らは私たちが…この地に来るよう神から命令され，6000レグア以上もある遠いポルトガルの地から，はるばる日本の地へ渡航して来たことを知って，たいへん驚いています[30]。

「1549年6月22日，フランシスコ・ザビエル書簡」

これらの地域は，数かずの困難と死の危険にさらされているからです。日本への渡航は大変危険で，大暴風雨，たくさんの浅瀬，無数の海賊の危険があり，とくに暴風雨のために三隻のうち二隻が到着すれば，大成功とされているほどです[31]。

「1552年4月8日，フランシスコ・ザビエル書簡」

どんなにたくさん〔艦隊が〕行っても，すべて難破してしまいます。たとえ海中で難破しないで日本の島に着いたとしても，日本人はたいへん好戦的で強欲ですから，メキシコからたくさん船が来ても，すべて捕獲してしまうでしょう[32]。

＊日本の生産物について

〈ウィルズ〉

この国は山がちで，雪害に悩まされ，ポルトガルほど温暖でもなく，われわれの知るところでは，油，バター，チーズ，ミルク，卵，砂糖，蜂蜜，酢，サフラン，シナモン，胡椒などはなく，大変貧しい。この島の住民は塩の代わりに大麦の糠（味噌か）を用い，身体の健康に益する医薬品は何も用いていない[33]。

〈イエズス会書簡の類似文〉

「1554年4月24日，ガスパール・ヴィレラ書簡」

我らが得ている情報によれば，日本の国は貧しく，ポルトガルよりも寒い上，山が多く，雪が降る。（略）この土地にはオリーブ油やバター，チーズ，牛乳，卵，砂糖，蜂蜜，酢がなく，サフランや肉桂，胡椒もないという。また，塩がなく，大麦の糖で塩味を付ける。果ては病人に薬として与える物もない[34]。

＊日本人の気質について

〈ウィルズ〉

人びとは温厚で，丁重に振る舞い，機知に富んで，礼儀正しく，偽りもなく，気高く誠実な会話をし，近年発見されたどの国民よりも優れているが，名誉を非常に気に掛けているので，彼らが最高に崇拝するものは名誉と考えられている。ゆえに彼らの間では侮辱に

よって不和や言い争い，あるいは暗殺や殺人が起こり，両親を敬い，約束を守り，不倫や窃盗を慎むのもすべて名誉のためである。窃盗については，ほんの僅かな盗みでさえ死をもって罰せられるが，それは，たとえ些細なものでも盗む者はだれもが，チャンスさえあればもっと高価なものを盗むであろうから，という原則に基づくのである。

盗みがこれほど厳格に罰せられるのは，国全体があらゆる必需品の乏しさと貧困に圧迫されているからで，欠乏よりは死を選ぶため，悲惨にも彼らは貧しさゆえに自分の子どもさえ絞殺してしまう。この人びとは家畜を屠殺したり食べたりはしない。彼らは主に魚や野草，果実を食糧にしており，健康的で，寿命が大変長い。米や麦の大量の蓄えもない。そこではだれも貧しいことを恥と思わないし，武士たちが富める人びとから敬意を受けないこともないし，最も貧しい武士も何らかの利得のために子を身分の低い者と縁組みさせようともしないし，ゆえに彼らは富よりも武士であることをより誇りにしているのである。

彼らの最大の楽しみは武具にあり，14歳になるとすべての少年は，武士に生まれようとなかろうと，刀と脇差しを携えている。彼らは大変優れた弓手でもあるが，男気と武勇の点からあらゆる他の民族を軽蔑する[35)]。

〈イエズス会書簡の類似文〉

「1549年11月5日，フランシスコ・ザビエル書簡」，

彼ら（日本人）は親しみやすく，一般に善良で，悪意がありません。驚くほど名誉心の強い人々で，他の何ものよりも名誉を重んじます。…（日本人は）侮辱されたり，軽蔑の言葉を受けて黙って我慢している人びとではありません[36)]。

「1561年10月8日付，コスメ・デ・トルレスの書簡」

また，名誉に関わることにおいては，昔のローマ人とはなはだよく似ている。したがって彼らが崇敬する主たるものは名誉であり，彼らの間ではこれを巡って数多の戦さを行い，多くの人が名誉のために死ぬ。名誉を失ったと考える時，自ら生命を絶つことが度々である。そのため，窃盗や他人の妻を奪うこと，そのほか類似の悪事や醜悪なことをほとんどしない。デウスを畏怖しないが，名誉のため両親を敬い，己の友人に対して誠実さを保つ[37)]。

「1549年11月5日，フランシスコ・ザビエル書簡」

（日本人は）武具を大切にし，たいへん信頼して，武士も低い〔階級の〕人たちもすべてが，刀と脇差とをいつも持っています。彼らは14歳になると，刀と脇差を持つことになっています[38)]。

「1552年1月29日，フランシスコ・ザビエル書簡」p. 521

私はこれほどまでに武器を大切にする人たちをいまだかつて見たことがありません。弓術は非常に優れています。…彼らはお互いに礼儀正しくしていますが，外国人を軽蔑しています…[39)]。

＊日本人の食事，賭け事，読み書き，礼節について

〈ウィルズ〉

彼らの食事は慎ましいが，酒をたくさん飲む。ワインを知らないので米から造った酒を飲むが，賭け事やあらゆる投機を嫌悪するのは，他人のものを得て自分を貪欲かつ物欲しげにするそうした行いに自分を委ねるのは人間のなかで最も下劣であると考えるからである。彼らはめったに誓いをしないが，する場合には太陽にかけて誓う。彼らの多くはきちんと読み書きを教えられているので，近いうちにおそらくキリスト教に入信するであろう。彼らはみな一人の妻を持つにとどめ，みな知識欲が盛んで，生来正直で礼儀正しい。彼らは神の話しを喜んで聞き，十分理解したときは特に喜ぶ[40)]。

〈イエズス会書簡の類似文〉

「1549年11月5日，フランシスコ・ザビエル書簡」

この国の人たちの食事は少量ですが，飲酒の節度はいくぶん緩やかです。この地方にはぶどう畑がありませんので，米から取る酒を飲んでいます。人びとは賭博を一切しません。賭博をする人たちは他人の物を欲しがるので，そのあげく盗人になると考え，たいへん不名誉なことだと思っているからです。宣誓はほとんどしません。そして宣誓する時は太陽に向かってします。大部分の人は読み書きができますので，祈りや教理を短時間で学ぶのにたいそう役に立ちます。彼らは一人の妻しか持ちません。…彼らはたいへん善良な人びとで，社交性があり，また知識欲はきわめて旺盛です。彼らはたいへん喜んで神のことを聞きます。とくにそれを理解した時には大変な喜びようです[41)]。

＊日本の統治者について

〈ウィルズ〉

彼らの統治機構は三つの地位で成り立っている。第一は高僧によるもので，その法令や布告により宗教に関するあらゆる公的私的事柄が決定される。日本人が「ボンズたち（坊主）」と呼んでいる僧侶たちの諸宗派は，その高僧が書状によって同じことを認可しない限り尊敬も権威も保てない。また，彼は，言わば司教に当たる東堂の地位を認証し，許可もするが，多くの場合彼らはさまざまな諸侯らによって指名される。

これら東堂はあらゆる点で大変に尊敬されており，より低い地位の僧たちに禄を与え，例えば偶像への参拝期間に肉食を行うことなど，多くの事柄に特別な権限で許可を与える。（略）

最後に，この高僧は，中国では見識と学問によって選ばれるが，日本では身分の高さと生まれで決められ，広大な所領を持ち，歳入も莫大なので，しばしば藩王や諸侯に反抗する。（略）

彼らの第二の権威者は，彼らの言う「法皇」で，神として敬われる帝王であり，その地

位は世襲と生まれによる。この御方は，地位を剥奪されない限り足を決して地面に触れることはなく，屋敷から出ることもないし，常に姿を見せない。廷内では籠で運ばれるか，もしくは地面から膝丈分高い木靴（下駄）で移動する。ふつう片側に刀を，もう片方に弓矢を置いて椅子に座り，肌の上には黒衣を，外側には赤衣をまとい，全てを糸杉模様の織物で覆っており，司教の僧帽らしきものに垂れ飾りのついた帽子を被っている。額は白と赤に塗られ，食事には土器の食器を用いる。

この帝王は，日本全土の栄誉に関する称号を決定するが，それらはこの島に夥しくあるもので，一般に文字を枠組にした印章が見られ，彼らの位階に応じて日々変えられていく。すべての貴人はこの法皇と折衝する使節を置いているが，それはこの国民が褒賞と名誉を熱望するからで，彼らは互いにだれが最も贈賄できるかを争っている。こうした経緯によって帝王は，領地や他の収入がないにもかかわらず，大変豊かになり，日本全土における最富裕者に数えられるであろう。

この最大の権力者も三つの理由で職位を失う。まず，既述のように，地面に彼の足が触れたならば。第二に，もし彼がだれかを殺したならば。第三に，もし彼が平和と安寧の敵であることが発覚したならば。もっとも，これらのどの理由も彼を死刑に処することにはならない[42)]。

〈イエズス会書簡の類似文〉

「1561年10月8日付，コスメ・デ・トルレスの書簡」

当国には三人の領袖，すなわち重立った人物がいる。その第一で主要な者は座主と呼ばれ，当国民の宗旨に関わる者で，いわば偶像の祭祀と呼ばれる人々の筆頭である。なぜなら，新たに開かれる宗派を承認する権限はこの人物が握っているからであり，もし彼の書付けによって認可されなければ，その宗派は人々の信用と尊敬を得られない。また，偶像に捧げ物をする他の人々の上役のようなものである東堂を指図する権限も彼にある。彼らを推薦するのは，宗派の大身の所領内のことであるとはいえ，彼らの役職への就任は座主の書付を介されてなされるのであり，これによって任命されると彼らは国の有力な大身，その他の人々の尊敬を集める。（略）

また，座主は宗派の重要な事柄，例えば俗人の大身に対し，東堂を免除するような権限も有しており，あまり重要でない雑事の免除，すなわち偶像を巡拝する時のような肉食を禁じられている時期にこれを免除するのは，彼によって任命された東堂の権限である。（略）

右の役職はシナにおいては学問と知識によって選ばれるのに対し，当地では世襲であったり，（任を）終える者の推薦であるが，これは通常，富と身分による。（任命された者は）日本の首都のようなものである都の僧院に住し，多くの土地と収入を得て，しばしば俗人の大身らと権力争いをする。

この（天）皇はいとも神聖で大いに崇拝されているが，三つの場合にはその地位を剥奪

されうる。すなわち，その第一は足を地面に付けた時，第二は誰かを殺害した時，第三は温和な人間でない時である。このうちの一つであっても，その職務と地位は剥奪されうるが，いずれの場合であれ殺されることはない[43)]。

＊謀反人に対する処罰について

〈ウィルズ〉

謀反人たちは，もし彼らが諸侯や武将であったならば，次のように処刑される。王はだれに対しても処刑の言い渡し日を選び，同じ日に郎党に対してもそれが公言され，彼の処刑日が伝えられる。被告人は使者にどこで自害すれば合法なのか尋ねる。王がそれを承認したならば，郎党はそれを栄誉と思い，最も良い衣服をまとい，胸から下腹まで身体を切り裂いて，自害する。こうした死に様を彼らは侮辱と受け止めず，父の罪は罰せられたので，その子女も財産を失うことはない。しかし，もし王が彼らを仕置人に処刑されるまで保留したならば，その命を存えるため力づくでその子女，奉公人，友人らとともに家に留めておく。王は彼を主たる判官の前に引き出させ，判官は反逆者と家族が殺害されるまで，最初に弓矢を放ち，次いで槍と刀で襲撃するが，これはずっと残る不名誉と汚辱である[44)]。

〈イエズス会書簡の類似文〉

「1557年10月29日，ガスパール・ヴィレラ書簡」

国王が己に対して謀反を起こし，或いは裏切った身分ある者を罰する方法は以下のようである。国王が謀反人の死（刑）を決定すると，その同日謀反人は解放され，同人には何れの日に死ぬべきかが伝えられる。謀反人は，もし殿下が望むならば，自害するであろうと答え，国王が同意すれば，彼はこれを大いなる名誉と考える。所持する最高の衣服を着て短剣を持ち，これを胸から腹の下まで刺し，次いで腹を一方の側から他方へと十字形になるように切って死ぬ。かかる方法で死ぬ者は謀反人として名誉を失うことはなく，その者の相続人と家は従前通りとなる。以上のことはすべて悪魔が彼の死後，地獄においてさらにひどい苦しみを与えるための策略である。また，もし国王が自害してはならぬ，人に命じて殺させるであろうと答えれば，謀反人はこの伝令を受けた後，彼の家臣や友人，子女ら全員とともに，自邸において武器を取って戦う準備を行う。国王は市の指令官および執政者のような役職にある者に十分と思われる兵員を与えて派遣し，同人が右のような（反逆の）大身を殺しに行くのである。大半の市民は，謀反人らが自邸や野で行う戦闘を見守る。（まず）矢を射かけ，その後接近して槍で攻撃し，最後に刀で戦う。かくして謀反人は己の家臣や子女，家族とともに死ぬのであり，彼の家は焼かれ，その一族の記憶はことごとく消滅し，彼らはその蒙昧さ故に地獄に堕ちる[45)]。

＊都の様子と僧院について

〈ウィルズ〉

インドの著述家はこの島にあるいくつかの大きな町について述べており，南部の港町鹿児島から300リーグ北にある都には王の玉座があって，島の他のどこよりも豊かな町である。都の人々は大変高貴で，彼らの言葉は最上の日本語である。都には9万戸以上の家があると言われ，さらにはボンズ（坊主），時宗，ハマカタ（尼方），すなわち僧侶，修道僧，修道尼の寺領や僧院などのほかに，五つの学寮を有する著名な大学がある[46)]。

〈イエズス会書簡の類似文〉

「1549年11月5日，フランシスコ・ザビエル書簡」

ここ（鹿児島）からミヤコまで〔日本里数で〕300里あります。その町の大きなことについて私たちが聞かされていることは，9万戸以上の家があること，学生たちが〔たくさん〕いる大きな大学が一つあってこれに五つの主な学院が付属していること，ボンズや時宗と呼ばれる私たちの修道者のような他のボンズ，アマカタと呼ばれる尼僧たちの僧院が200以上もあるとのことです[47)]。

＊日本の大学について

〈ウィルズ〉

日本には他にも五つの名を知られている大学があり，それらはコイア（高野），ネグル（根来），ホミ（近江），フレンキ（比叡山），バンドゥ（坂東）という名である。最初の四校には少なくとも3500人の学生が在籍しているが，五番目はもっと多い。というのも坂東地方は大変に広大で，6人の諸侯がその地を領有しており，うち5人は最大の公に臣従し，その公も「都の大王」と呼ばれる日本国王の臣下である。もっと小さな学校ならば，この島のさまざまな場所にたくさんある[48)]。

〈イエズス会書簡の類似文〉

「1549年11月5日，フランシスコ・ザビエル書簡」

ミヤコの大学の他に五つの主要な大学があって，それらは高野，根来，比叡山，近江と名づけられる四つの大学はミヤコの周囲にあり，それぞれの大学は3500人以上の学生を擁しているといわれています。ミヤコから遠く離れた坂東（関東）と呼ばれる地方には，日本でも最も大きく，最も有名な別の大学があって，他の大学よりも大勢の学生が行きます。坂東は非常に大きな領地で，そこには6人の公爵がいますが，そのうち一人が支配者で，他の者は皆彼に従っています。そしてこの支配者は日本の国王に従っているのです。…これらの主要な大学のほかに，全国の至るところにたくさんの学校があると彼らは言っています[49)]。

＊フロイスの日本報告の内容

この書簡については上述のように全文が邦訳されているので，ここではその内容を詳述しないが，「日本島」と重複する文意も見られる。フロイスは好んで日本と西洋の習俗を比較対照しており，それのみに焦点を当てた和書も存在するが，ここにもその一端が見られる[50)]。その一部を挙げると，寒暖の差の激しい日本の気候，厳格な礼儀作法，武士の帯刀と名誉，子殺し（間引き）の習慣，食事の内容，見事な子どもの躾，窃盗を死罪とする私的処罰，恐怖による統治と平和，都にいる世俗と宗教の君主（将軍と天皇）および公家の存在，夥しい僧院と山伏の数，鬼や悪魔の所業（仏教に帰する），蝦夷地との交易，葬儀と埋葬･墓の様子などである。

5　結語

以上を要するに，日本在住のイエズス会宣教師からの情報は，いったんコインブラのポルトガル人学者マヌエル・ダ・コスタの下に集められ，ダ・コスタはさらにそれらをローマのピエトロ・マッフェイに送った。一時イエズス会に在籍してマッフェイの知遇も得ていたウィルズは，それらの情報をきわめて入手しやすい環境にあり，それを「日本島」に取り入れたのであった。したがって，基本的にはイーデンと同様にカトリック世界の著作や資料からの英訳であり，日本についてのウィルズの記述にイエズス会士と異なるイギリス人独自の視点があるわけではない。

では，ウィルズの「日本島」は当時のイギリス人にどのような意味を持ったであろうか。1600年，オランダ船リーフデ号で初めて日本にやって来たイギリス人ウィリアム･アダムズ（日本名：三浦按針）が残した11通の書簡にウィルズの名はない。しかし，アダムズは主君徳川家康に何度か北方航路の開拓を進言し，家康からその推進を援助する旨の言質を得ている[51)]。一方，アダムズは自身の手紙で1590年代に主にモロッコとの貿易に従事するバーバリ会社に勤務していたころ，「東洋貿易に関心を寄せるようになった」としている[52)]。もちろん1590年代には長くインドに滞在していたオランダ人ヤン・ハイヘン・リンスホーテンやディルク・ヘリッツゾーン・ポンプらが本国に帰国し，斬新なアジア情報がオランダにもたらされた[53)]。おそらくオランダ人とも仕事をしたアダムズがそれらを通じて北東航路や東アジアに対する関心を高めたことは想像に難くない。

しかしより興味深いのは，リーフデ号の日本到着からおよそ3ヶ月後，大坂でアダムズに会ったイエズス会宣教師ペドロ・モレホンPedro Morejonが「（アダムズが）われわれの年次報告によって，日本人が優れた民族であること，わが神父たちがこの国で多数のキリスト教徒を得たことなどを知っていた」と日本布教の重鎮アレッサンドロ・ヴァリニャーノに伝えていることである[54)]。アダムズがウィルズのように直接イエズス会年報に接したとは考えられないので，モレホンの話が事実とすれば，アダムズは『東西インド誌』を情報源にフロビッシャーの記録や「日本島」の行から北東航路と日本に関心を寄せたことは大いに考えられる。

『東西インド誌』が発行された1577年は，ユグノー戦争やオランダ独立戦争が進行中であり，西欧一帯がカトリックとプロテスタントの激しい敵対関係の渦中にあった。こうしたなかで発行された同書は，おそらくイギリスの北方航路，特に北東航路開拓熱にいっそう拍車を掛けた。デレク・マサレラが述べるように，同書はジョン・ディーを鼓舞し，1580年代のアーサー・ペットArthur Petやチャールズ・ジャックマンCharles Jackmanの北東航路開拓探検に結びついたであろう[55]，当時のイギリスは敵対国の物的財産だけでなく知的財産までもうまく収奪できたと言えそうである。

※一般になじみの薄い人名のみ原綴を付記した。

注

1）『東西インド誌』の原題を示す。なお，以下同書の原文から一部を引用して該当頁を示す場合には‘*The History of Travayle*’と略記する。
The History of Travayle in the West and East Indies, and other countreys lying eyther way towardes the fruitfull and ryche Moluccaes, as Moscovia, Persia, Arabia, Syria, Agypt, Ethiopia, Guinea, China in Cathayo, and Giapan: With a Discorse of the NorthWest Passage. Also the Navigation and Voyages of Lewes Vertomannus, Gentleman of the citie of Rome, in the year of our Lorde 1503. London, 1577.

2）「日本島」の原語は‘Of the Ilande Giapan, and other litle Isles in the East Ocean’

3）マルコ・ポーロの旅行記の英訳書名は次のとおりである。
The most noble and famous trauels of Marcus Paulus, one of the nobilitie of the state of Venice, into the east partes of the world, as Armenia, Persia, Arabia, Tartary, with many other kingdoms and prouinces. No lesse pleasant, than profitable, as appeareth by the table, or contents of this booke. Most necessarry for all sortes of persons, and especially for trauellers. London, 1579. 訳者のジョン・フランプトンJohn Frampton は主にスペインで商売していたイギリス商人であるが，現地で異端の嫌疑で投獄された。その後脱走して帰国し，同書も含めスペイン語からの英訳書を何冊か手がけている。上記『東西インド誌』同様，当時のスペインの知的成果がかなりイギリスにもたらされていたことがわかる。

4）原題‘Aloisius Froes, to his companyons in Iesus Chirist that remayne in china and Indie’東光博英訳「一五六五年二月二十日，ルイス・フロイス師が都の市より，シナおよびインドのイエズス会の司祭および修道士にしたためた書簡」，松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集；第Ⅲ期第2巻』同朋舎，1998年，303～317頁。

5）本稿では『オクスフォード国民伝記事典』〈下記9)〉に従って「ウィルズWilles」としている。『東西インド誌』の初版本にも‘Richarde Willes’とある。ただ，同事典の説明では「ウィリスWillis」の表記もあるとしている。

6）『ユートピア』ではアメリゴ・ヴェスプッチの，『太陽の都』ではコロンブスの，『ニューアトランティス』ではペルーから太平洋を超えて中国と日本に向かう船隊の，各航海から理想国に達した設定になっている。

7）ピーター・フレンチ（高橋誠訳）『ジョン・ディー：エリザベス朝の魔術師』平凡社，1989年，191頁。

8）ディーは1577年に『完璧な航海術*The Perfect Arte of Navigation*』を著しているし，北東航路探検家に「日本に達すればイギリス人イエズス会士がいて役立ってくれるであろう」と助言している。リチャード・ハクルートRichard Hakluyt編『イギリス国民の主要航海』，原題*The Principal*

Navigations, Voyages, Traffques and Discoveries of the English nation: made by sea or over-land to the remote and farthest distant quaters of the earth at any time within the compasse of these 1600 yeeres. Glasgow, 1903, vol. 3, p. 263.

9）H. C. G. Matthew and B. Harrison (eds.), *Oxford Dictionary of National Biography*, Oxford, 2004. 同シリーズのvol. 59にウィルズの，vol. 17にイーデンの項目がある。

10）ミュンスターのドイツ語原書は*Cosmographia*, *oder*, *Beschreibung allen Länder*, Basel, 1542英訳は'*A Treatyse of the Newe India*'。同書の第五巻では，小アジア，パレスティナ，アラビア，ペルシア，アフガニスタン，インド，シナ，タタール，アメリカなどについて述べられている。

11）イーデンの原題は*The Decades of the Newe Worlde or West India*. これら二書には邦訳書（抄訳）があり，それぞれ巻末に解説がある。ペドロ・マルティールの原題はPedro Mártir, *De orbe novo: Decades 1–3*. 1530. 邦訳（清水憲男訳）『新世界とウマニスタ』岩波書店（アンソロジー新世界の挑戦2），1993年。オビエードの原題はGonzalo Fernández de Oviedo y Valdés, *La Natural hystoria de las indias*, Toledo, 1526. 邦訳（染田秀藤・篠原愛人訳）『カリブ海植民者の眼差し』岩波書店（アンソロジー新世界の挑戦4），1994年。

12）Cortés, Martin, translated out of Spanyshe into Englyshe by Richard Eden, *The arte of nauigation, conteyning a compendious description of the sphere, with the makying of certen instrumentes and rules for nauigations: and exemplified by manye demonstrations*. London, 1561.

13）Tainsier, Jean, Translated into Englyshe by Richard Eden, *A very necessarie and profitable booke concerning nauigation, compiled in latin by Ioannes Taisnierus..*, London, ca. 1575.

14）Paske-Smith, Montague B. T. (pref.), *England and Japan*, Kobe, 1928. pp. 45–46. '*The History of Travayle*', folio 254.

15）ローマ学院Collegio Romanoはイエズス会の創立者イグナティオ・デ・ロヨラによって1551年に設立されたが，およそ30年後の教皇グレゴリウス13世時代に大きく拡充され，以後「グレゴリアン大学」と呼ばれるようになる。

16）上掲14）Paske-Smith, p. 9.

17）原題'*Poematum Liber*'この詩論には当時主としてフランスで活動した博物学者で詩論も著したジュールC. スカリジェ Jule C. Scarigerら大陸の学者からの影響が大きいという。当時，詩は俗世界を超えて精神を高みに導く神秘性・崇高性を持つとされ，ディーも詩論を著している。こうした精神性はウィルズも共有していたと見られる。

18）この部分では古典古代時代のプラトンやセネカも新大陸に言及しているとしている。

19）ペレイラおよび16世紀の中国に滞在した二人の修道士の滞在記の近代英語訳がある。
Charles R. Boxer (ed.), *South China in the Sixteenth Century: being the narratives of Galeote Pereira, Fra Gaspar da Cruz, O. P. Fra Martin de Rada, O. E. S. A. 1550–1575*, London, 1953.

20）『東西インド誌』刊行の年，探検家フロビッシャーが現カナダ・バフィン島の原住民をイギリスに連行し，イギリス国民を熱狂させたが，同書にその記述はない。

21）北極海で遭難死した際のウィロビーの書簡は上掲8）Hakluyt, *The Principal Navigations*, vol. 3, *North-Eastern Europe and Adjacent Countries*, に所収されている。

22）ジェンキンソンのこの旅行記も上掲8）vol. 3に収録され，一部は邦訳されている。朱牟田夏雄訳・注「モスクワからブハラへの船旅」，『イギリスの航海と植民：一』岩波書店，1983年所収。

23）*Calendar of State Papers, Spanish*, vol. 11, 1916, pp. 38–39. に多少記録がある。

24）ここではカントンとモルッカ諸島の間に「アイナンAinan」という理想郷の島が存在し，またカントンの近くに「サントリアーヌSantlianum」というきわめて劣悪な島が存在するとしている。

25）原題*A História das Missões dos Jesuítas no Oriente, Até ao Ano de 1568*, Coimbra.

26）原題*Rerum a Societate Iesu in Oriente Gestarum Volumen, Continens Historiam Iucundam Lectu Omnibus Christianis, Praesertim ijs, Quibus vera Religio est Cordi...*, Cologne, 1571.

27）原題*Historiarum Indicarum libri XVI*, Firenze, 1588.

28）エーヴォラ版の成立事情については『十六・七世紀イエズス会日本報告集；第Ⅲ期第1巻』xvii-xx頁参照。
29）Paske-Smith, p. 39. '*The History of Travayle*', folio 252.
30）『ザビエル全書簡』475頁。
31）『ザビエル全書簡』449頁。
32）『ザビエル全書簡』617頁。
33）Paske-Smith, p. 39. '*The History of Travayle*', folio 252.
34）『十六・七世紀イエズス会日本報告集；第Ⅲ期第1巻』135頁。なお，この訳文中に「糖」とあるのは「糠（ぬか）」の誤りであろう。ウィルズの原語は'barly bran'，ヴィレラの原語は'farelos de cevada'である。
35）Paske-Smith, p. 40. '*The History of Travayle*', folio 252.
36）『ザビエル全書簡』471–472頁。
37）『十六・七世紀イエズス会日本報告集；第Ⅲ期第1巻』337–338頁。
38）『ザビエル全書簡』472頁。
39）『ザビエル全書簡』521頁。
40）Paske-Smith, p. 41. '*The History of Travayle*', folio 252.
41）『ザビエル全書簡』472頁。
42）Paske-Smith, pp. 41–43. '*The History of Travayle*', folio 252–253.
43）『十六・七世紀イエズス会日本報告集；第Ⅲ期第1巻』338–339頁。
44）Paske-Smith, p. 44. '*The History of Travayle*', folio 253.
45）『十六・七世紀イエズス会日本報告集；第Ⅲ期第1巻』250–251頁。
46）Paske-Smith, pp. 44–45. '*The History of Travayle*', folio 253. なお，この部分の邦訳「時宗」の原語は，ウィルズが'Lequixil'，ザビエルが'Gixu'となっている。
47）『ザビエル全書簡』492頁。
48）Paske-Smith, pp. 45–46. '*The History of Travayle*', folio 253. なお「比叡山」の原語はザビエルでは'Fieson'であるが，ウィルズでは'Frenci'となっている。
49）『ザビエル全書簡』492–493頁。
50）ルイス・フロイス（岡田章雄訳注）『ヨーロッパ文化と日本文化』岩波書店，1991年。
51）田中丸栄子（企画編集）『三浦按針11通の手紙』長崎新聞社，2010年。82，92–93頁．なお，岡田章雄は『三浦按針』（講談社1985年）330頁で，アダムズが1590年代にオランダ人の北東航路探検隊に加わったとする説に肯定的であるが，論者には疑問である。
52）田中丸栄子，同書48頁。
53）ヤン・ハイヘン・リンスホーテン（岩生成一他訳）『東方案内記』岩波書店，1968年。原著は1598年ロンドン刊。
54）Delplace, Louis, *Catholicisme au Japon*: vol. 2, Bruxelles, 1909–1910. p. 82.
55）Massarella, Derek, *A World Elsewhere: Europe's Encounter with Japan in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*, New Haven & London, 1990. pp. 64–65.

参考文献

Cortés, Martín, translated out of Spanyshe into Englyshe by Richard Eden, *The arte of nauigation, conteyning a compendious description of the sphere, with the makying of certen instrumentes and rules for nauigations: and exemplified by manye demonstrations*, London, 1561.
da Costa, Manuel, *A História das Missões dos Jesuítas no Oriente, Até ao Ano de 1568*, Coimbra. 1571.
Eden, Richard (and Richard Willes), *The History of Travayle in the East and Wast Indies, and other*

Countreys lying eyther way towardes the fruitfull and ryche Moluccaes, as Muscovia, Persia, Arabia, Syria, Agypt, Ethiopia, Guinea, China in Cathayo, and Giapan : with a Discourse of the North West Passage. Also the Navigation and Voyages of Lewes Vertomannus, Gentleman of the citie of Rome, in the year of our Lord 1503. London, 1577.

Frampton, John (tr.), *The most noble and famous trauels of Marcus Paulus, one of the nobilitie of the state of Venice, into the east partes of the world, as Armenia, Persia, Arabia, Tartary, with many other kingdoms and prouinces. No lesse pleasant, than profitable, as appeareth by the table, or contents of this booke. Most necessarry for all sortes of persons, and especially for trauellers.* London, 1579.

Hakluyt, Richard, *The Principal Navigations, Voyages, traffques and discoveries of the English nation : made by sea or over-land to the remote and farthest distant quaters of the earth at any time within the compasse of these 1600 yeeres*, vol.3, Glasgow, 1903.

Maffei, Giovanni Pietro, *Rerum a Societate Iesu in Oriente gestarum volumen, continens historiam iucundam lectu omnibus Christianis, Praesertim ijs, quibus vera religio est Cordi...*, Cologne, 1571.

Maffei, Giovanni Pietro, *Historiarum indicarum libri XVI*, Firenze, 1588.

Münster, Sebastian, *Cosmographia, oder, Beschreibung allen Länder*, Basel,1542.

Taisnier, Jean, Translated into Englyshe by Richard Eden, *A very necessarie and profitable booke concerning nauigation*, compiled in latin by Ioannes Taisnierus.., London, ca.1575.

Her Majesty's Record Office,*Calendar of State Papers, Spanish*, vol.11, London, 1916.

Charles R. Boxer (ed.), *South China in the sixteenth century: being the narratives of Galeote Pereira, Fra Gaspar da Cruz, O.P. Fra Martin de Rada, O.E.S.A.1550–1575*, London, 1953.

Delplace, Louis, *Catholicisme au Japon: vol.2*, Bruxelles, 1909–1910.

Massarella,Derek, *A World Elsewhere: Europe's Encounter with Japan in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*, New Haven & London, 1990.

Matthew, H.C.G. and B.Harrison(eds.), *Oxford dictionary of national biography*, Oxford, 2004.

Paske-Smith, Montague B. T. (pref.), *England and Japan*, Kobe, 1928.

岡田章雄『三浦按針』講談社，1985年.

河野純徳訳『フランシスコ・ザビエル全書簡』平凡社，1985年.

田中丸栄子（企画編集）『三浦按針11通の手紙』長崎新聞社，2010年.

松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集；第Ⅲ期第１巻』同朋舎，1997年.

松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集；第Ⅲ期第２巻』同朋舎，1998年.

ゴンサーロ・オビエード（染田秀藤・篠原愛人訳）『カリブ海植民者の眼差し』岩波書店（アンソロジー新世界の挑戦4），1994年.

トマーゾ・カンパネッラ（近藤恒一訳）『太陽の都』岩波文庫，1992年.

ジェンキンス他（朱牟田夏雄訳注）『イギリスの航海と植民：一』岩波書店，1983年.

ピーター・フレンチ（高橋誠訳）『ジョン・ディー：エリザベス朝の魔術師』平凡社，1989年.

ルイス・フロイス（岡田章雄訳注）『ヨーロッパ文化と日本文化』岩波書店，1991年.

フランシス・ベーコン（川西進訳）『ニュー・アトランティス』岩波文庫，2003年.

ペドロ・マルティール（清水憲男訳）『新世界とウマニスタ』岩波書店（アンソロジー新世界の挑戦2），1993年.

トマス・モア（澤田昭夫訳）『ユートピア（改版）』中公文庫，1993年.

Richard Willes' 'The Islande Giapan': The First Description of Japan in England

Yoshikazu MORI

Abstract

In 1577 a book of cosmography including the first description on Japan in England, 'The History of Travayle', was published in London. The editor Richard Willes was very interested in non-European world knowing the geographical discoveries at that time. Although Willes had once studied theology, he inherited the work of Richard Eden who introduced many informations on the New World to England, and set up a book of cosmography including many countries of Asia. That is 'The History of Travayle', and almost of its contents are from the books of Iberian states. We can see that the sentences on Japan in Willes' book are from the letters of Jesuit missionaries such as Francisco Xavier and Luis Frois. On this paper I show some sentences of willes' book, and make it clear that they are truly from them.

Keywords: England in sixteenth century, the age of discoveries, history of relations between Japan and England